



郷土史

ていね

第 31 号

平成 22 年 7 月 14 日
手稲郷土史研究会会報

第 50 回 (平成 22 年 6 月 9 日) 定例会の研究発表

「手稲に住んで 25 年～外から見た手稲」

稲穂 高木秀子氏

生い立ち

高木さんは、末っ子で津軽の黒石市生まれ、由緒あるお家柄で 1 歳の時青森へ移り住んだそうである。

青森といえば「りんご」と東北三大祭りの「ねぶた祭り」が有名である。青森では「ねぶた」と言い人形型、弘前では「ねぶた」と言い扇形、そして黒石では「ねぶた」と言うそうであるが形は黒石独特のものであり、両方の形が共存したものだとか。一度見てみたいものである。

しかし、なぜ同じ県内であるのに、土地によって呼び名が違うのか不思議である。

映画が好きで青森では 4, 5 歳の時、毎週のように映画を見に行ったとのことで、年配の方であればよく知っている映画スターは、新諸国物語の伏見仙太郎を始め、時代劇の大川橋蔵、サザエさんでおなじみの江利ちえみ等々。

その中でフランキー堺の「私は貝になりたい」は特に印象に残っていると。

映画は中学、高校と段々見に行く時間がなくなって、年に 2~3 回行く程度になってしまったそうである。

そして青森高校へ進学、先輩には淡谷のり子、三浦雄一郎、果ては太宰治など、名の通った蒼々たる人達がおられるようで驚きである。

なお淡谷のり子はお母さんと同期だそうである。これもびっくり！

高木さんが所蔵する当時の古い写真で「三輪車の変遷」を見せて頂いたが、これは今まで見たことのない大変珍しい写真であった。

1972 年から 73 年には、ニューヨークで日本映画「フーテンの寅さん」を見たそうで、まさに映画好きの一面が感じられる。

手稲にて

やがて青森を離れ北海道に移り住むようになる。

手稲でびっくりしたことといえば山菜を食べたことだとか。あづき菜は甘みがあり、こごみも好きで、お母さんが漬けた「わらびの塩漬け」はとても塩辛かった記憶があるそう・・・。

青森でも山へ行けば色々な山菜が採れると思うが、そんなに種類や味が違うのか、そして何に驚いたのか謎である。当時は都会派で山歩きをあまりしなかったのではないかと想像する。

確かに手稲山溪は自然景観と山菜の宝庫であり、山歩きの好きな人にはたまらない魅力がある。残念ながら筆者は山歩きが余り得意ではなく山菜は買って食べる方であるが。

稲穂にお住まいの高木さんにとって、手稲山周辺には散策する道がたくさんあり歩くと楽しいそうで、雪解けの頃の手稲のハイキングコースが好きとのことである。

「手稲に住んで 25 年～外から見た手稲」という高木さんの意図はなかなかつかめないが、これからもあちこち探検して地元である「内から感じた手稲」の新しい発見をどんどんして頂きたいと思う。
(文責：立花邦雄)



次回の予定

次回(8月11日)は、前田在住の西村巖氏の講演「樺太で終戦、シベリア抑留、引揚げ～手稲音頭と共に～」平佐伸二会員の研究発表「手稲山口村のよもやまばなし」を予定しております。

「新聞・史料で見る先史・有史時代の軽川」

富丘 野村武雄氏

平成 20 年 10 月、富丘 14 手稲警察署裏の遺跡 (N533) 発掘の現場を多くの会員が見学。この発掘報告書は市内で市教委が関った中で最も内容に興味があり、出土品は一万五千点に近く市内発掘では大きなものの一つです。

《手稲警察署裏に「隠された原始人の影？」》

遺跡 (N533) から膨大な出土品の整理は大変なこと。出土品の年代測定は「放射性炭素年代測定法」で、手稲では「クルミの内側の堅い果皮が炭化したものを使い、放射性が長い時間かかって減少することを利用し経過年数を測定します。その結果 4 千年ほど前からの物 (土器、石器、動植物の骨や種子) であることが判りました。

この縄文土器時代の人と後のアイヌの人、そうして現代人とどう繋がるかは判っていません。市内の古い遺跡で人骨の出土が無いのも理由の一つです。ただ近い場所の手稲前田公園内 (N295) 遺跡で「人歯」が出土、その周りに副葬品があり、珍しい淡赤色で琥珀製の石鏃一個や大陸産らしい原石、「手稲式土器」も出土しています。

さらに近い三樽別川沿い富丘 36 遺跡 (N316) も N533 と出土品はそっくりですが 3 遺跡の関連はまだ不明です。

ちなみに今回の出土品には、海のアシカ、オットセイ、鹿の骨、樹木のクルミの内果皮、ブドウ、クワ、タラノキ、キハダ、モクレン、シソ等の種子もあり、縄文時代の石狩の海がずっと入り込む紅葉山砂丘群が前田まで伸び、当時の暮らしも偲べれます。当時この遺跡は手稲山丘陵の裾野が海に入り込む境界の場所 (海拔 7m) でした。

《夢か？先われた？本当にあった『富丘ストーンサークル』(環状列石)の謎》……小樽、余市と親戚か？

N533 から北西 800m 内の地に、70 年前 (昭和 15) 入植した山本茂、淳一父子は畑から沢山石器土器を見つけ、高い場所に、大きな石を 6m 四方の円形にぐるっと立て並べた物を発見。畠のとんだ邪魔物を取り除くのに大変苦労したと言う。これこそ市内でまだ見つからない「環状列石」を手稲で発見した貴重な記録です。(山本茂『富丘今昔物語り』と淳一氏の談話より) 現在環状列石は縄文時代の墳墓であったとされます。しかも道内で手稲式土器を伴う環状列石は日本海・石狩湾に面する小樽忍路 (オシヨロ) 余市町フゴッペにもあり、それらとは関係があるのかなのか？……これからの課題、みんなで日本海・石狩湾縄文文化圏の夢を描いて見ませんか。

《丸山》(手稲中学の裏山、町の元スキー場の秘かなアイヌ語伝説！……『神の聖地』の謎！)

123 年 (明治 23) 永田方正の記録に「ガルガワ 潤川 (カレカワ) 春日水アリテ夏日水無シ故二潤川ト呼ブ『ガルガワ』ハ『カルカワ』ノ訛ナリ 原名ヲ『トシリパオマナイ』ト云フ 奥羽人 (伊達藩白石の移民) 初メ『ガルサワ』ト呼ビ今『ガルガワ』ト云フ 故二軽川ノ字ヲ用フ 誤ヲ以テ誤ヲ伝フ者ト云フベシ」さらに『トシリパオマナイ』とはぐ (墳頭川) だと言う。つまり「墓の・上手・にある・川」の意味 (山田秀三『北海道の地名』より) そこで軽川の下手にあたり墓 (墳) のある小高くて丸い山を「『アイヌ』ハ『コタンカラカムイ』(国作神)の墳陵ナリト云イ伝ウヨシ 小円丘ニシテ栗樹其上ニ生ズ 和人之レヲ「モリ」ト云フ 土ヲ盛り上ゲタル如キ形状ナレバナリ」(『北海道蝦夷語地裏解』9 頁より)

この『丸山』(144.6m) は、アイヌの人々の「神の聖地」であったといいますが、77 年前 (昭和 8) の手稲村地図にも明記され、札幌自動車道のできるまで小学生などのスキー場があり現在は丸山町内会名にもなっています。(『手稲区歴史ガイドマップ』参照) 山頂から石狩湾・暑寒別連峰の景観はすばらしい名所だといわれます。

不思議なことに、N533 遺跡 富丘環状列石 円山 (国作り神の墓) 手稲山頂へと向う一直線上に位置します。それは夏至の太陽の通る空の道にも近いようです。他方、興味深いのは小樽忍路では、土場遺跡 忍路環状列石 500m 西の地鎮山頂 (100m) には別の巨石状列石が発見されています。

或いは円山にも「栗の木が生え」ていたほかに巨石遺跡があったか？……「富丘は明治・大正時代まで立派な庭石土台石の大産地として有名だった」と古老から聞くと或いは……とってしまいます。

《北海タイムス記事『郊外繁盛記』(昭和 8, 8, 12~10, 28 連載) にみる軽川の夢大プロジェクト》

平成 14 年手稲橋上駅、自由通路「あいくる」誕生などで南北往来も容易となり一層賑わいを増した手稲。すでに昭和 8 年頃から、この丸山 広い鈴蘭 (リリー) 野生公園 (富丘西公園一帯) 桜並木と石畳の手稲温泉街光風館 手稲鉾山滝の沢温泉 スポーツセンターとグラウンド・丸山スキー場 大高級分譲住宅街と電車の誘致！ 縄文人、擦文人、アイヌの人々も親しんだ手稲山麓・聖地円山中心の大計画の夢がありました。ぜひ新聞一見を！

[文責：杉村斌]